

(吉田ら)を使用。基本属性それぞれについて、「病院看護職の在宅を見据えた看護活動尺度」4因子の平均値の差をt検定と一元配置分散分析を用いて比較した。解析にはIBM SPSS Statistics 22を使用した。【倫理的配慮】A大学疫学研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。【結果】回収数2,136件(回収率73.3%)。1)基本属性:年齢は30歳未満31.4%,30歳代30.6%,40歳以上37.4%,経験年数は5年未満26.6%,5~10年未満19.6%,10年以上53.2%,職位は,師長4.5%,副師長7.1%,スタッフ83.2%,在宅看護論履修あり66.4%,なし32.7%,在宅看護研修受講あり28.9%,なし70.5%であった。2)4因子と基本属性の関係:全因子において,年齢及び経験年数が高いほど尺度得点が高かった。また,在宅看護論履修群,在宅看護研修受講群,スタッフよりも管理職の師長・副師長の尺度得点が有意に高かった。また,「社会資源の活用」にのみ師長・副師長間での差がみられた。【結論】在宅を見据えた看護活動は,経験年数や職位の高さに比例して実施度が高かった。超少子高齢多死社会を支える在宅ケアを見据えた看護人材を養成するためには,看護職それぞれの背景を考慮した建設的・継続的な教育が望まれる。

30. 大学病院看護職員における地域完結型看護の実践度評価

大谷 忠広¹, 牛久保美津子², 金井 好子¹
 富田千恵子¹, 杉本 厚子¹, 尾上 悦子¹
 荻原 京子¹, 佐光 恵子², 近藤 浩子²
 常盤 洋子², 神田 清子²

(1 群馬大医・附属病院・看護部)
 (2 群馬大院・保・看護学)

医療の質向上や健康長寿社会の実現に向け,看護職には地域完結型医療・ケアの考え方に立脚した地域医療連携の推進を実践し教育できる教育指導者の育成が求められている。

本研究では,大学病院看護職員(以下,看護職員)720名を対象に質問紙調査による『地域での暮らしや見取りまでを見据えた看護ができる人材に関する調査』を実施し,在宅へ戻る患者への看護活動の自己評価に関する基礎調査を行った。その結果,533名(回収率74.0%)から回答を得た。看護職員は『退院支援に関する研修』を79.2%が希望し,在宅へ戻る患者への看護活動として『入院前の生活状況の把握』(84.1%),『家族介護力の評価』(78.1%),『退院後の本人の希望の把握』(76.3%)の実践が明らかとなった。以上より,基礎教育での在宅看護論の受講,卒後は大学病院と訪問看護ステーションの交流会,病棟と患者支援センター間の退院支援カンファレンス開催等の活動により,退院後の生活を見据えた継続性のある実践を行っていると考えられる。

31. 腎性全身性線維症における皮膚線維化・石灰化機序におけるエンドセリンの役割

茂木精一郎, 荻野 幸子, 内山 明彦
 上原 顕仁, 山田 和哉, 横山 洋子
 竹内 裕子, 石川 治

(群馬大院・医・皮膚科学)

腎性全身性線維症(NSF)は全身に線維化・石灰化をきたす疾患であり,ガドリニウム(Gd)を含む造影剤を透析患者に使用することにより生じることが知られている。組織所見にてCD34陽性細胞が多くみられ,間葉系幹細胞(MSC)が病態に関与する可能性が示唆されているが機序は不明である。本研究は,皮膚線維化・石灰化におけるGdとMSCの役割の解明を目的とした。GdがMSCの増殖と石灰化を亢進させる際に,MSCのエンドセリン-1(ET-1)とET-1受容体の発現が共に増加することを見出した。ET受容体拮抗薬(ボセンタン)によってGdによるMSCの増殖と石灰化の亢進が抑制された。また,ボセンタンによってGdによるERKやAktのリン酸化亢進の抑制がみられた。NSF患者の血清中ET-1は高値であり,NSF患者組織においてはET受容体の発現が亢進していた。これらの結果より,皮膚組織に移行したGdがMSCのET-1シグナルを活性化し,石灰化・増殖(線維化)が誘導される可能性が示唆された。

32. ラミンA遺伝子変異を同定したAtypical Werner症候群における光老化の検討

茂木精一郎, 横山 洋子, 内山 明彦
 荻野 幸子, 上原 顕仁, 山田 和哉
 竹内 裕子, 石川 治

(群馬大院・医・皮膚科学)

核膜蛋白質ラミンAの遺伝子異常としてHutchinson-Gilford syndrome(HGS)や家族性脂肪萎縮症などが知られており,Laminopathyと総称されている。最近,我々はWerner症候群(WS)様の症状を呈する早老症患者において核膜蛋白質ラミンA遺伝子変異を同定し,Atypical Werner症候群(AWS)と診断した。自験例は本邦初症例である。患者由来皮膚線維芽細胞ではHGS細胞様の核変形が多くみられ,ヘテロクロマチンの局在異常もみられた。

自験例の線維芽細胞を用いて,自然老化(酸化ストレス)および光老化(UVA照射)に対する反応を検討した。その結果,AWS由来線維芽細胞は酸化ストレスやUVA照射によるアポトーシスを受けやすく,老化の進行や症状の発症を遅らせるために患者や家族に遮光指導を行う必要性が示唆された。また,近年,HGSの症状に対してファルネシル転移酵素阻害薬の有効性が報告されているが,自験例の細胞に対する影響についても検討を行った。